

鉢植えの文化論

INOMATA, Kazumi / 猪俣, 佳瑞美

(発行年 / Year)

2016-09-15

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第383号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2016-09-15

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013424>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	猪俣 佳瑞美
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 607 号
学位授与の日付	2016 年 9 月 15 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 竹内 晶子 副査 教授 田中 優子 副査（学外）立教大学名誉教授 野田 研一

鉢植えの文化論

この論文の方法と意義

本論文は、「鉢植え」が人間とのかかわりにおいて持つ多様な機能と、様々な文化において担ってきた含意を考察するものである。前者については、西洋における鉢植えの歴史にも目配りをしつつ、主として日本における「鉢植え」の多様な展開とその機能を、古代から現代にいたるまで通時的に追って明らかにする。後者については、古今東西の絵画・映画作品から、鉢植えが大きく扱われている 6 作品を選び、それぞれにおける鉢植えの含意を子細に分析する。

鉢植えは、従来の研究においては周辺的なものとして扱われることが常であり、学術研究の主対象とされることがほとんどなかった。その意味で本研究は、極めて画期的なものである。さらに様々な文化、時代、位相における鉢植えと人間との関係を明らかにすることを目指す本研究はおのずから、多様な学術的・理論的アプローチを駆使する、高度に包括的かつ学際的な研究となっている。

論文の目次

序章

1. 研究の背景と目的
2. 主な先行研究と本研究の意義
3. 論文の構成

第 1 部 鉢植えの文化の歴史

第 1 章 西洋における鉢植えの文化概観

1. はじめに

2. 「アドニスの園」にみる紀元前の鉢植え
3. 外来植物と鉢植え
4. ウォードの箱と鉢植え
5. 労働者と鉢植え
6. おわりに

第2章 日本における鉢植えの文化

第1節 古代から中世における鉢植え

1. はじめに
2. 古代中国における鉢植えの文化
3. 日本における最古の鉢植え
4. 「鉢植え」と「盆栽」という言葉の使用に関して
5. 中国文人志向と中世の鉢植え文化
6. 「盆山」と「鉢の木」
7. 「盆山」と「石」
8. 絵巻物にみる「盆山」と「鉢の木」
9. 「盆山」「鉢の木」の作り手
10. おわりに

第2節 近世における鉢植え

1. はじめに
2. 古典園芸植物と鉢植え
3. おわりに

第3節 近代における鉢植え

1. 日本文化として海外に出た鉢植え
2. 盆栽と鉢植え
3. 外国人がみた日本の鉢植えの文化
4. 日本近代化と鉢植えの文化

第3章 現代社会における鉢植えの文化

1. はじめに
2. 空間と鉢植え
3. 代償の自然としての鉢植え
4. おわりに

第2部 表象としての鉢植え

第1章 絵画の中の鉢植え

1. はじめに
2. *Allegory of Grammar* (文法の寓意像)における鉢植え

3. 蘭画「不忍池図」における鉢植え
4. 油絵 *Isabella and the pot of Basil* における鉢植え

第2章 映画の中の鉢植え

第1節 儂さを運ぶ植木鉢：『レオン』にみる鉢植えの含意

1. はじめに
2. 古典的なパラダイム
3. 鉢植えが初登場する場面
4. 触るという行為
5. 根が意味するもの
6. 映画『レオン』における鉢植えが表象するもの
7. おわりに

第2節 鉢植えと子どもたち：映画『誰も知らない』分析を通して

1. はじめに
2. 雑草を育てる子どもたち
3. 「鉢植え」ができるまで
4. 小さな大人
5. 映画『誰も知らない』における表象としての鉢植え
6. 植物と子どもの親和性
7. おわりに

終章

1. 総括
2. 今後の課題

それぞれの章の要旨と評価

序章

・概要

序章の「研究の背景と目的」では、(1) 鉢植えが人との関係の中で発揮する機能を解き明かす、(2) 鉢植えが表象として持ちうる含意を明らかにする、という、本論文の二つの目的を述べ、(1) については歴史考察を中心に、(2) については作品分析を中心に行うことを述べる。

「主な先行研究と本研究の意義」においては、鉢植えを取り上げる先行研究を紹介する。その結果明らかになるのは、鉢植えは（わずかな例外を除けば）、園芸史や庭園史の中で軽く触れられるか、あるいはごく限られた鉢植えジャンル（盆栽や奇種栽培など）のみが取り上げられるのが常だったという、従来の研究の著しい偏りである。

「論文の構成」では、各章がどの時代や文化をとりあげるのかを説明するとともに、その中で具体的にどのような鉢植えが分析され、分析の結果鉢植えのどのような機能や含意

が明らかになるのかまでが明示されている。

・評価

先行研究の探査は極めて丁寧である。鉢植えそのものの人間との関わりと、文化において鉢植えが備える象徴性をできるだけ多様な場面でとらえる、という本論文の切り口の独自性が、そこから浮き彫りにされる。また、詳細な「論文の構成」の説明は読者にとっていわば、事前に手渡される「地図」のようなものであり、非常に多岐にわたる時代・文化・ジャンルをとりあげる本論文の読解を大いに助けるものである。

第1部 鉢植えの文化の歴史

第1章 西洋における鉢植えの文化概観

・概要

本章は、西洋における鉢植えの歴史を概観する。まず古代ギリシャの祭式「アドニスの園」を紹介し、ドゥティエンヌがそこに指摘した「未熟さ」と「卑小さ」という（大地と対比された）鉢植えの二つの含意を確認する。そして16世紀以来のプラントハンターや育苗家たちの活動、ウォードの箱といった事例から、外来植物を移動させる手段としての植木鉢の発展を見る。さらに18世紀以後のイギリスにおいて推奨された「合理的な娯楽」としての園芸や、都市部の住宅の「窓辺の庭」などの事例をとりあげ、家庭における鉢植え栽培を促進したこうした風潮の背後に、福音主義に基づく家庭崇拝があったことを指摘する。

・評価

最初に紹介される「アドニスの園」の祭礼と、ドゥティエンヌが指摘したその含意は極めて重要であり、本論文を通じて紹介される様々な鉢植えの事例に通底する。ドゥティエンヌの分析をここで詳細に紹介することによって、論文全体を貫く大筋の一つが読者に見えやすくなっている。またイギリスの労働者および家庭内の女性たちに、福音主義的見地、教育的見地から「園芸」が奨励されたという事例の紹介は、次章で日本の明治以降の鉢植え文化を考えるうえで、補助線として非常に有効である。

なお本章における西洋の鉢植え史の扱いは、実は「概観」というには不足で、古代から現代までの中でいくつか特徴的なものを取り上げたにすぎない。日本の鉢植え史をとりあげる次章と比べると歴然たるボリュームの差があり、バランスの悪さは否めない。ただしこれについては、序章において、日本の鉢植え史との「比較対象として」西洋の鉢植え史を取り上げているにすぎないと断ってはいるのであるが。

しかしたとえそうではあっても、できるだけ網羅的な研究を志して「鉢植えの文化史」と銘打つのであれば、日本以外の事例が少なすぎるという批判は免れ得まい。本論文が取り上げる日本以外の例は欧米に偏っているが、中東文化圏、インド圏、そして中国や朝鮮半島などのアジア圏についても、さらなる探索が必要であろう。

また、本論文でとりあげられた欧米の事例にしても、日本の事例を考察する場合と比較

すると、結論を急ぎすぎて分析が皮相になりがちなきらいがある。たとえば19世紀のイギリスの裕福な中流階級で流行した、シダ栽培箱のもつ社会的・文化的意義は何だったのか？ そのころ流行したクリスマスツリーの習慣の背景も、単に「福音主義」で済まされるのか？ 日本以外の文化圏の鉢植えにも考察の手を伸ばし、それぞれについて丁寧な分析を施して議論を深めることにより、より網羅的かつ徹底的な「文化史」を構築できる筈である。

第2章 日本における鉢植えの文化

・概要

本章は、古代、中世、近世、近代の日本における鉢植えの歴史を追う。第一節では古代、中世を扱う。古代の部では、古代中国における鉢植えの文化を概観した後、日本最古の鉢植えの記録である『続日本後紀』の「二寸の橘」をとりあげる。それが鉢に植えられ天皇に献上されるに至った背景として、天人相関思想があることを指摘する。

中世の部では、絵巻の中で「盆山」や「鉢の木」の描かれた9場面をとりあげ、詳細に検討する。そこから、中世より鉢植えが「視覚的もてなしの装置」でありかつ「誇示的消費」の対象であったことが明らかになる。さらに謡曲〈鉢木〉に、中世の「鉢の木」文化を近世の庶民に引き継ぐ機能を指摘する。

第二節は近世をとりあげる。まず「奇品」と呼ばれる変種植物への人々の熱狂を検討する。当時の図像からは、万年青など葉を鑑賞する植物の奇品の場合、富裕層にとって植木鉢は運搬容器でありつつも、(ヴェブレンのいう) 衍示的消費の一環である「誇示的容器」でもあったことが明らかになる。一方、つる植物で鉢から離れた場所にある花を愛でる朝顔であれば、植木鉢が誇示的容器となりにくい。それが、朝顔栽培が庶民の間でも流行した理由の一端であるという。また当時の盆栽樹形の図譜から、「蛸作り」に代表されるこの時代の盆栽のスタイルの、特徴と独自性を整理する。

第3節は近代すなわち明治以降を扱う。まず万国博覧会における、日本の鉢植えと外国人の接触をとりあげる。次いで現代でいう「盆栽」のスタイルおよび名称が、支那趣味の強い影響下で——支那趣味を愛好する日本の文人のスノビズムをかきたてるものとして——成立し、それが輸出品となって「日本の文化を代表する事物」となる過程を追う。他方、お雇い外国人モースが滞日中に書き留めたエッセイやスケッチからは、当時の庶民が廃材すらをも駆使して広く楽しんでいた鉢植え文化が確認される。

そして19世紀末の外国向けの日本の絵葉書写真(横浜写真)にみる鉢植えを検討した結果、鉢植えが常に和装の日本人女性と対で被写体となっていることを明らかにし、それらが「未熟な国」日本、という西洋人のオリエンタリズムを補強していた可能性を指摘する。最後に、ヴィクトリア朝的良妻賢母主義が日本に導入されるのと期を同じくして、ヴィクトリア朝的な「家政の一環として女性が担う園芸」が日本でも推奨され、同時に、国家主義によって強化された家父長制度のもとで、権力者の趣味であった盆栽が、一家の主としての男性の手に委ねられるに至った過程を追う。

・評価

非常に長大な章で、古代から近代まで多岐にわたる鉢植え現象が取り上げられている。にも関わらず雑多な印象を与えないのは、取り上げられた複数の事例が、互いに呼応関係にあることが明らかにされているからである。たとえば古代でとりあげた「二寸の橘」は、近世の「奇品」に対する熱狂と根底で相通じるものがあることがきちんと解き明かされている。またその「奇品」の万年青においては誇示的容器としての植木鉢が重要視されていたという点が抑えられ、それと朝顔の植木鉢を比較することで、朝顔栽培が庶民をまきこんで流行できた理由が解明できる。明治期における女性と園芸の結びつきを、男性と盆栽の結びつきと対比しつつ説いている部分も、簡潔な記述ながら非常に興味深い。

とりわけ、外国における日本イメージの構築に「鉢植え」がどう機能していたのかという視点から横浜写真を探査する、という調査は他に例がない。その結果得られた、鉢植えと女性が被写体として対になっているという発見は、非常に意義深い。これが、第一章の「アドニスの園」と同様「未熟なもの」として対になっているという指摘、そして西洋のオリエンタリズムを補強したという指摘はもっともなものではあるが、このあたり議論が駆け足で結論を急ぎがちな傾向にある。せつかくの発見を最大限に生かすためにも、当時の西洋からみた日本と女性と鉢植えの関係については、より丁寧な議論が望まれる。

大変充実した章であるが、一番の問題点は、この一章が本論文のほぼ半分（100 ページ）を占めていて、全体の構成を崩している点である。第三章の第1節、第2節、第3節をそれぞれ、第3章、第4章、第5章として独立させる、あるいは、外国からの影響の強い近代以降を別立てにするなど、全体のバランスを整えるためにもう一工夫あってもよからう。

第3章 現代社会における鉢植えの文化

・概要

本章では、現代社会において鉢植えが置かれている空間を室外と室内、公有地と私有地にわけて考察する。室外については日本の路地文化の鉢植えに関する先行研究を、室内についてはデンマークのオフィスの観葉植物に関する先行研究をとりあげ、それらから得られる個別のデータを、さらに大きな理論的枠組み（人文地理学者のイーファー・トゥアンの空間論、ロジェ・カイヨワの「遊び」論）に組み込むことで、現代社会における鉢植えが人間にとってもつ様々な意義を考察するものである。

トゥアンの空間論を援用することで、路地の鉢植えには、（1）私的な場所と公的な場所の境界をあいまいにする、（2）町や市域といった見知らぬ「空間」を、心地よい「場所」に認識させる、という機能があることが明らかになった。またオフィスの観葉植物が果たす様々な機能も浮き彫りになった。

人々が生きている鉢植えを室内外に持ち込むのは、その鉢植えが回りの人間にとって様々にポジティブな働きかけをするからにほかならない。だからこそ、その鉢植えが枯れ

たときには、人間に対してネガティブに働きかけるものとなる。生とともに死を可能性としても鉢植えには常にそのリスクがあるのだが、実際、オフィスの観葉植物の事例研究は、観葉植物が枯れたときの周囲への悪影響を明らかにするものでもあった。それに対し、「枯れるリスク」のない鉢植えが、模造植物である。それらが人にとって持ちうる意義を、ハルオ・シラネの「二次的自然」という観念を導入して検討した結果、現代の模造植物が、平安時代の貴族社会が自分の生活圏に組み入れた模造の（安全で安心な）「二次的自然」の延長でもあることが明らかになった。またカイヨワの理論の応用からは、「生きている鉢植え」が提供する「遊び」の多様性が露わになった。

・評価

本章は、屋外の鉢植えと屋内の鉢植え、それぞれを「路地」と「オフィス空間」に代表させて、人に対して鉢植えが果たしうる多様な機能を明らかにする。トゥアンの理論の説明も過不足なくわかりやすく、その理論を応用した鉢植え機能の分析も、よく整理されている。こうして鉢植えが人間に対してもつ機能を整理することを通じて、その植物が枯れた場合の悪影響を明らかにし、そこから「枯れない自然」である模造植物が人間にとって持つ機能を解き明かす、という本論の構成は非常にスムーズで説得力に富む。ディズニールランドと比較した模造植物の機能の説明も、大変有効である。

ただし、江戸時代の人工都市「吉原遊郭」では、季節ごとにことなる鉢植えが道路上に設置されており、それによって、祭りの時期を逃がさないよう「安全に」、自然の時間を人工の空間内に持ち込んでいた。模造植物でなくても、鉢植えはこのように、人工空間である都市に「安全に」自然をもちこむ機能を果たしうる。模造植物と自然の鉢植えと「二次的自然」の関係については、さらなる考察が必要だろう。

なお、カイヨワの理論は本論文には不要であろう。

第2部 表象としての鉢植え

第1章 絵画の中の鉢植え

・概要

本章は、鉢植えが重要な役割を担っている絵画作品4点（ローラン・ド・ラ・イールの *Allegory of Grammar* (1650)、ウィリアム・ホガースの *Tailpiece to the Catalogue of Pictures Exhibited in Spring Garden* (1761)、小野田直武の秋田蘭画「不忍池図」(1770年代)、ウィリアム・ホルマン・ハントの *Isabella and the pot of Basil* (1867)を取り上げ、これら絵画作品で鉢植えが担う含意を考察する。

ド・ラ・イールの絵画のパロディともいえるホガースの版画には、「未熟」という、「アドニスの園」にみられた鉢植えの含意が強く表れている。「不忍池図」は、鉢植えが水辺に描かれているだけで、それをその場所に運んだ人為を強く感じさせ、絵画の背後の物語性へと鑑賞者の想像力を掻き立てる。植木鉢は常に、世話する人の手を必要とするからであ

る。そして殺された恋人の頭を植えた鉢からバジルが生い茂る、というキーツの詩に基づくハントの絵は、「死が生へと向かう再生の場所」という植木鉢の性質を強く打ち出す。

・評価

本章においては、第1部の歴史的考察で明らかになった数々の植木鉢の機能や社会的・文化的意義が、古今東西の絵画作品の中にも確認された。それぞれの事例は第1部における論と見事に呼応して、論文全体の有機的な構築に多いに貢献している。

また「不忍池図」の鉢植えが、持ち込んだ人の存在を感じさせる、つまり「物語性に思いをめぐらせる装置として機能している」という指摘は、この有名な蘭画についての新しい発見である。ただ、描かれた植木鉢そのものにも注目し、それが西洋のものであることにも注目すれば、より考察を深めることができたであろう。

本章の問題点は、第1部の歴史考察にくらべると、とりあげられる絵画作品の数が少ないという点である。例をより増やしてこの章を膨らませることができれば、本章のみならず論文全体の説得力がいや増す筈である。

第2章 映画の中の鉢植え

・概要

本章は、鉢植えが単なる小道具ではなく、その作品において重要な象徴的役割を帯びて使われているという映画二作品をとりあげ、それぞれの作品内における鉢植えの機能や含意を詳細に分析する。

最初に取り上げるのはアメリカ映画『レオン』(1994)である。そこで殺し屋の主人公が片時も手放さない鉢植えは、主人公にとっての自分自身、あるいは主人公にとっての親しい他者、ヒロインにとっての主人公など、様々な象徴的意義を担っているが、それらに加えて、未熟な存在(子供)としてのヒロインと主人公を象徴するものでもあり、また二人の関係のはかなさを象徴するものともなっている。すなわち、「アドニス園」における植木鉢と同様の含意を強く担って、この映画においては使われているのである。

次に取り上げるのは、日本映画『誰も知らない』(2004)である。ここで子供たちは、カップヌードルの容器に雑草の種を植えて鉢植えを作るのだが、それは弟妹の母親代わりを強いられる主人公の少年の象徴であり、かつ、その少年の手が離れたときに死んでしまう末の妹を表してもいる。

コメニウスやルソーなどの教育思想にみられる合自然の教育における「自然類推」など、植物のアナロジーで子供の成長をとらえる見方は広く普及している。『誰も知らない』はむしろ「自然類推」をアイロニカルに逆手にとった形で子供を描いているが、上記の二作品にかぎらず、子供が主人公となる映画で鉢植えがしばしば登場する理由としては、こうした自然類推があることを指摘する。

・評価

現代の人気ハリウッド映画の中にあられる鉢植えが、古代ギリシャの「アドニスの園」に見られたのと同じ含意（未熟さ、儂さ）をもって使われている、という本章の指摘は、極めて説得力に富む。現代のポップカルチャーの中に脈々とながれる、古代文明に共通した鉢植えの文化的意義は、時代をこえて鉢植えが人間と切り結んできた関係の深度と永続性を読者に強く訴えるものである。

子供が主人公となる映画ではしばしば鉢植えが重要な役割を果たす、という指摘も、大変興味深い。本章が説くとおり、自然類推はその理由の一端ではあろう。しかしこれらの映画で子供たちが鉢植えを「世話する」様がしばしば描かれる理由については、本章は「子供たちのための庭」というフレーベルの教育理論なども援用して説明しようとしているが、その説明がやや混乱気味であることは否めない。本章がひいた二作品に限らず広く映画においてみられる子供と鉢植えの関係性については、さらに例をふやし、理論的な精度を上げて分析していく必要があるだろう。

終章

・概要

これまで各論が明らかにしてきた、鉢植えの多岐にわたる機能と含意を、この終章では図表を用いつつまとめなおす。それによれば鉢植えとはまずなによりも、「生と死を内包する両義的なもの」としてあり、また人為ぬきに存在し続けることができないゆえに常に「人の気配を漂わせるもの」として認識されている。さらに「移動可能なもの」であり、「世話、管理するもの」「庭の代用品」「休止の場所」「管理者の能力を他者に伝えるもの」「教材」「所有者の分身」として機能する。また鉢植えは上記の機能をもつゆえに、「財力・権威」「スノビズム」「自分・他者」「未熟さ・卑小さ」「儂さ」を表象し得るものとなっているのである。

・評価

各論の中で、他の章で取り上げられる事例との関係性はできるだけ明示されてはいたが、こうして終章で図表を使って全体の関係性を見せることによって、あらためて「鉢植え」の機能と含意の多様性とそれらの間で結ばれる関関係が明らかになる。ただし難を言えば、その図表にはまだ漏れがある。再考してより精度をあげる必要があるだろう。

論文全体の評価と審査結果

以上のように、本論文は「鉢植え」という、いわば文化的装置としての自然に注目し、様々な時代・ジャンルにおけるその展開を網羅的に探究するものである。人文学研究において未開拓であった新しい研究トピックを切り開く、大変画期的な研究と言えよう。

また、単に事例を羅列するのではなく、「鉢植えによって人間は自然をどのように自分た

ちの価値判断の中に組み込んだのか」という問題意識が、一貫して保たれている。すなわち、それぞれの文化やジャンルの中の鉢植えがどのように使われているかというだけでなく、どのような文化的含意を担っていたのか、何を象徴しているのかという点にまで踏み込んでいる点が、高く評価される場所である。鉢植えの機能とその文化的な象徴性を能う限りくみとろうという著者の情熱は、分析対象だけでなく分析手法も実に多様であるという、本論文の極めて高い学際性に結実している。

しかし、野心的であるからこそその問題点もある。本論文が駆使したさまざまな分析理論のうち、成功しているものも多々あるが、上記で指摘したとおり理論的精度が足りないもの、あるいは不要と思われるものもなくはない。また分析対象も、できるだけ網羅的であろうとしているが、それでも対象間で分析の深度にかなりの偏りがでていることは否めないし、上述のとおり抜け落ちた部分も多い。

また、鉢植えの象徴性を考えるにあたっては、その独自性をとらえるために、鉢植えと隣接するもの（花瓶、生け花、庭園、温室、金魚鉢など）との違いを考察する必要がある。これらもまた、「自然を人間の価値体系の中にとりこんでいる」ものだからである。

さらに言えば日本以外の鉢植えを考察する際、本論文ではもっぱら日本の鉢植えとの共通性に注意が注がれていたが、両者の違いにも十分注意して分析する必要がある。たとえば、本論文で分析された事例を見る限りにおいて、古代ギリシャ以来の「未熟なもの」としての鉢植え観が日本にあらわれるのは、どうやら明治に西洋の園芸観が導入されて以降のことのようにあるが、その点が本論文ではきちんと指摘されていない。鉢植えの機能や文化的意義の異文化間における違いにも着目し、その理由を探ることは、本研究における比較文化的アプローチを深めるためには不可欠と思われる。

このような課題を抱えてはいるが、これだけ多岐にわたる事例と理論をとりあげながら、それらの中に有機的な連関をつくりあげ、人間にとっての「鉢植え」の意義について包括的な議論を展開した著者の力量は、特筆すべきものである。なによりも本論文が極めて独創的かつ意欲的で、研究対象・アプローチともに学際的な、新しい研究分野を切り開いたものであることに疑いはない。本論文の成果をもとに、鉢植えと人間のかかわりについて、ひいては自然と人間のかかわりについて、著者の研究が今後さらなる発展を遂げるであろうことが十分に期待される。

以上の理由により審査小委員会は、本論文提出者が博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格を有するとの結論に達した。